



No.103 2012・4・15

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM

発行 石川県立歴史博物館

〒920-0963 金沢市出羽町3番1号

TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836

<http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/>



ISHIKAWA-KEN
HISTORY
MUSEUM

れきはく

春季特別展

れきはく

特選資料展

— 収蔵庫からお宝登場 —



重要文化財 春日懐紙



◆関連イベント <要入館料>

①展覧会解説（全3回）

日 時 4月21日（土）・5月3日（木・祝）・5月22日（火）

②収蔵庫ツアー（全2回）

日 時 4月30日（月・振休）・5月30日（水）

③建物紹介ツアー（全4回）

日 時 5月 6日（日）……師団司令部、偕行社
5月11日（金）……本館
5月25日（金）……師団司令部、偕行社
6月 2日（土）……本館

※①②③すべて13時30分より開始。所要時間は約1時間程度。

※事前申込不要。ご参加ご希望の方は、当日正面受付へお申し出下さい。

◇会 期

4月21日（土）～6月3日（日）会期中無休

◇会 場

特別展示室

◇開館時間

午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

◇入 館 料

一 般 550円（440円）

大学生 440円（360円）

高校生以下無料／65歳以上440円

（ ）内は20名以上の団体料金

春季特別展

れきはく

特選資料展

— 収蔵庫からお宝登場 —

昭和四十二年（一九六七）に郷土資料館準備室として誕生した博物館は、昭和六十一年（一九八六）には歴史博物館となり、現在まで四十五年を数えます。その間、県内・県外を問わず多くの方々からのご理解・ご協力をいただき、十七万点余の資料を収集してきました。建物自体を含めて国指定文化財三件、県指定文化財十九件、点数を数えれば三千点を超える貴重な資料を有することとなりました。

このたび、歴史博物館としては二十七年ぶりの改装を控え、博物館の歩みをご紹介します。一環として、ジャンルや形態がそれぞれに異なる指定文化財を一挙公開するステージを企画いたしました。展示では、常設展示でお借りしている指定文化財も関連付けてご紹介します。

一、ジャンルを超えて

スタートした直後の石川県立郷土資料館は、考古、歴史、民俗、自然を包括しており、引き継いだ歴史博物館では、考古、歴史、民俗と美術に含まれる資料を収蔵しています。

収蔵資料のなかで、民俗資料の「白峰の作り生



カンジキ（白峰の作り生生活の用具）

八四八点が収蔵されています。

また、出土資料ということで、鎌倉～室町時代の珠洲焼が三点、県の文化財に指定されています。なかでも「珠洲 秋草文壺」は鎌倉時代の作とされ、胴部に彫り描かれた草花の文様が魅力的です。口縁部が割り取られたこと（その後、補填）が確認できることで、蔵骨器としての使用だったという事です。きれいな壺ですが、ちよつと驚きです。



珠洲 秋草文壺

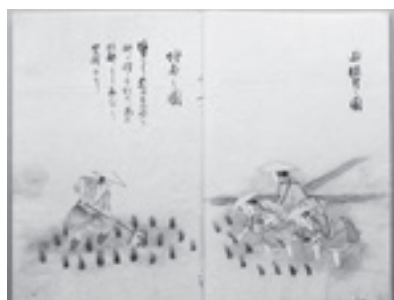
歴史資料の中では、郷土資料館以来積極的に収集してきた古文書資料があります。鎌倉時代の資料で、江戸時代には加賀藩主前田家が所蔵していた春日懐紙が、平成二十一年（二〇〇九）重要文化財に指定されました。当館が所蔵する歴史資料としては初め

てです。また、石川県内には、旧家伝来の古文書や地区有文書、社寺に所蔵されている文書など、他の都道府県を圧倒するほどの量が存在しています。その一分、一寺分が五〇〇～一〇〇〇点というのも珍しくありません。なかには数千点にも及ぶ大古文書群ということも…。



重要文化財 春日懐紙

そのなかから、「後藤家文書」を紹介しておきましょう。昭和五十九年（一九八四）に県の文化財に指定されましたが、その点数は一八〇五点に及びます。後藤家は、江戸時代に加賀藩の十村役を務めた家で、早い時期から石川郡押野村に住していました。現代と同様、江戸時代においても都市近郊農村としての特徴を有しており、貴重な歴史資料です。



民家検労図（後藤家文書）

現在、歴史博物館として公開している赤レンガ三棟も、平成二年（一九九〇）に国の重要文化財に指定され現在に至っています。も

二、時代を描く

今回の展示では、常設展示で借用している指定文化財も紹介していきます。歴史博物館所蔵の「大般若経」（もと輪島市八幡寺の資料の一部）と「珠洲・秋草文壺」（珠洲・正院出土）に、珠洲・妙栄寺の「阿弥陀如来懸仏」、志賀・高爪神社の「薬師如来坐



歴史博物館 赤レンガ棟

とともに、見学会を実施します。

造に関するところも紹介しています。同じ陸軍の建造物として、県立能楽堂に隣接する旧陸軍第九師団司令部庁舎と金沢偕行社の二棟は、国の登録文化財になっています。展示では、写真を使って紹介するとともに、見学会を実施します。



旧陸軍第九師団司令部庁舎

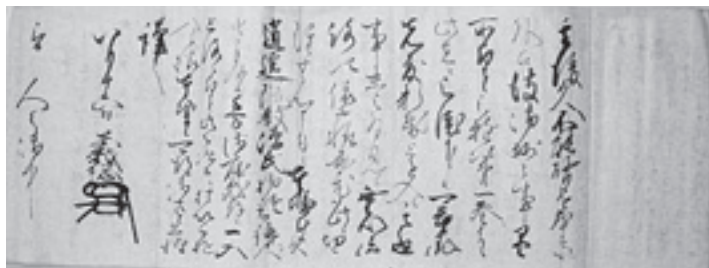


旧陸軍金沢偕行社

像」は、いずれも奥能登の鎌倉時代の資料です。珠洲・馬縹「常俊家文書」や珠洲・白山神社の「獅子頭」に、本館所蔵の「大般若経零本」（もと輪島市八幡寺の資料の一部）、「珠洲 鳥樹文小壺」（珠洲・宝立出土）と並ぶと、奥能登の南北朝～室町前半にかけての資料になります。古い時代ほど資料の収集は困難が伴いますが、文字資料や発掘資料などを横断的に見ていくことで、わかりやすくなるでしょう。

戦国～江戸時代初期では、「畠山義総関係文書」「後奈良天皇宸翰女房奉書」「織田信長朱印状」があり、室町末期から戦国時代の加賀・能登の歴史描写に、大きな影響を与えています。「小宮山家文書」は福井県敦賀にあった豪商の古文書ですが、一点一点のうちの大部分が前田利家とその家臣団の重鎮たちが発給した書状や、敦賀周辺の領主が発給した文書で占められています。なかでも利家が発給した文書は九通含まれており、稀有の資料群となっています。

江戸時代の資料では、「加州金平鉦山絵巻」「辰巳用水絵巻」「能登国採



畠山義総書状



「犀川夏月」（金沢八景より）



加州金平鉦山絵巻（部分）

魚図絵」の絵画資料に、「後藤家文書」や「岩佐家文書」に含まれる「民家検券図（上中下三冊本）」や「湖水獵業絵図」などがあり、その製作意図や内容から、当時の加賀藩の産業政策などを垣間見ることもできます。「金沢城下図屏風（犀川口町図）」は金沢八景の描写と比較していくことで、実際の金沢町の風景に迫ることができるかもしれません。

日頃、収蔵庫で休んでいる機会が多い資料たちですが、ジャンルや時代といった「テーマ」を設けて一堂に会します。特別展示室という「舞台」に立った文化財たちを、ぜひご堪能ください。

韓国展余話

「姉妹館交流展・何が一番困ったか」

昨年秋、韓国全州で国立全州博物館との姉妹館交流二十周年を記念した特別展が開催されました。加賀藩を素材に「日本の江戸時代」を紹介したもので、十月十七日の開幕式には、両県(道)知事も出席し、盛大なオープニングセレモニーが催されました。この間、当館からは、事前調査に一名、開幕式に向けた打ち合わせに二名、搬出護送に一名、展示準備に二名、開幕式にむけて館長・副館長・総務課長の三名、閉幕後の撤収・搬出護送に二名と、延べ十名以上の職員が現地に出向き、展覧会の現場を支えました。



韓国交流展準備作業のテレビ取材(2012年10月・国立全州博物館)

開催にあたっては、長い交流の賜物とはいえ、それぞれの段階で幾多の問題が発生。そのつど両館スタッフの真摯な議論と思いやりにより乗り越えて、韓国初の「本格的な近世日本の展覧会」は、韓国国内でも高く評価されたようです。さて、こうした一連の作業の中で「困った事」といえば、やはり言葉の違いによる、展示内容や実務的な意思疎通の問題でした。しかし、今回は、相互に優秀な国際交

流スタッフ(通訳)がつき、館員同志のカタコトの語学力を充分補ってくれました。交流の「立役者」は、展示作業スタッフを含め、こうした人々でもあったのです。

ところで、展示・開会式準備のため渡航した私にとって、「一番困った事」として記憶に残るのは、実は、連日の会食のなかの「コマでした。今回の展示では、私と塩崎学芸員にテレビの密着取材が付き、韓国での展示作業はもちろん、日本での打ち合わせ

当初からカメラ撮影が入りました。これにより特別展の内容が舞台裏を含めて両国の特別番組で紹介され、大きな反響をいただいたのは良かったのですが…。

展示準備も最終段階のある日、交流の雰囲気伝えるため、両館スタッフの慰労夕食会での歓談のようすを取材することになり、韓国式の伝統料理店での宴席を撮影。お互いにマッコリを酌み交わし、日韓の食文化をめぐる歓談中、カメラマンが「絵になるから」ということで、三cmほどある芋虫(蚤かカブトムシの幼虫?)の佃煮を、立場上私が食べることに…。(内心は泣きながら)画面では笑顔で「友好の証し」を演じたのでした。というところで、個人的には、展示や交渉の苦勞よりもまず、この瞬間が「一番困った」場面だったしだと思います(苦笑)。

(学芸課長 本康宏史)

主な刊行物のご案内

石川県立歴史博物館展示案内	(税込定価)	一、〇〇〇円
石川県立歴史博物館蔵品目録		一、八〇〇円
加賀百万石への道 ―戦国から太平へ―		二〇〇円
昭和ワンダーランド ―モノでたどる戦後―		一、〇〇〇円
石川のお宝史 ―名宝から文化財へ―		三〇〇円
弥生ムラの風景 ―越のクニ生み・境界・交流―		一、二〇〇円
御用絵師梅田九栄と俳諧 ―芭蕉の教えを守った男―		三〇〇円
肖像画にみる加賀藩の人々		一、四〇〇円
KOJIE 百・華・緯・乱 ―丸紅所蔵衣裳名品展―		五〇〇円
春日懐紙		五〇〇円
本願寺展 ―世界遺産の歴史と至宝―		二、三〇〇円
トキ舞う空へ ―鳥と人の文化史―		一、〇〇〇円
徳川將軍家と加賀藩 ―姫君たちの輝き―		一、〇〇〇円
くらし&娯楽の大博覧会 ―昭和ヒストリー1960~1980―		九〇〇円
染の華 織の心 ―加賀・能登の技とデザイン―		八〇〇円
館蔵資料選集 れきはく所蔵の指定文化財 最新刊!		一、〇〇〇円



※総合カウンターで販売中。定価はすべて税込。郵送ご希望の方は、当館へ直接お問い合わせいただくか、当館ホームページ「刊行物案内(図録等)」をご覧ください。(電話〇七六―二六二―三三三六)

企画展「れきはくコレクション 2011」終了



二〇一二年二月十八日から企画展にもかかわらず、「2011」となっていることに違和感を持たれたかもしれませんが、この企画展は、平成二十三年度に当館が収集した資料と皆様方から寄贈していただいた資料の中から、特に注目されるものを披露する年度末恒例のものです。華やかな花鳥を描いた九谷焼の珈琲具に魅了され九谷焼に目覚めたという方や、金沢最後の浮世絵師島野春彰の描いた下絵を直に観られる展示に大いに感激された方もいました。期間中、四回のギャラリートークではテーマごとに、展示品の詳しい説明や見どころなどを紹介しました。

企画展「新春を祝う－辰年のお正月－」終了

新春企画展は二〇一二年の干支「辰」にちなみ、館蔵品の中から龍をデザインした絵画や工芸品を中心に、おめでたい掛け軸や屏風絵、お正月の室内遊びについて紹介しました。天神堂の組み立て



を初めて体験する子どもも多く、興味深げに楽しみなが家族で取り組む姿も見られ、博物館でお正月を満喫できたようです。また、金沢の風習などを知るためにも、このような展示を今後も続けて欲しいというご意見を多くいただきました。

「隆盛」に通じる「龍」にあやかり、この一年が良い年であることを願っています。

催事日録

平成二十三年度も当館の各種行事にたくさんの方に参加していただきました。歴史散歩やバスツアーなどの行事については毎回紹介していますが、その他の講座について簡単に報告します。



「常設展示ワンポイント解説」では、毎回のように参加してくださる方がいたり、たまたま入館した方が足を止め耳を傾けてくださるということもあります。各回とも十名程度（もつと多いこともあります）の参加者です。展示室内での説明にはちょうど良く、学芸員に質問もしやすい雰囲気になっています。三十分という短い時間で、「れきはく」を何倍も楽しむことができ、常設展示を新たな視点で見ることができるようになります。今年度の参加者は全十回で八十九名でした。

「れきはくゼミナール」は、原始から現代までの歴史、民俗についての当館学芸員による少し専門的な、時間を超過することもありがちな熱い九十分となっています。講義後、個別に質問される方もいて、講義内容がより深まっているように思われます。興味のある分野、テーマにだけの参加が可能のため参加者数の変動はありますが、今年度は全十回で二百五十四名の参加がありました。

平成二十三年度の各テーマ（タイトル）および新年度の予定等について、ホームページでも紹介しています。



「常設展示ワンポイント解説」＆「れきはくゼミナール」

行事日程（4～7月）

月日	行 事	内 容
5/4（金）	常設展示ワンポイント解説	「れきはくメイト情報」をご覧ください。
5/19（土）	れきはくゼミナール	
6/1（金）	常設展示ワンポイント解説	
6/16（土）	れきはくゼミナール	
7/6（金）	常設展示ワンポイント解説	

◎開講時間：午後2時～

◎会 場：常設展示ワンポイント解説：関係各展示室

◎受講料：常設展示ワンポイント解説：展示室内行事につき、入館料が必要

◎申し込み：必要

れきはくゼミナール：無料

☆常設展示ワンポイント解説

常設展示室の資料を、当館学芸員がワンポイント解説します。原則として毎月第一金曜日に実施。時間は午後2時から約30分。どなたでもご参加できます。

☆れきはくゼミナール

当館学芸員が歴史や文化に関する様々なテーマを取り上げてお話しします。原則として毎月第三土曜日に実施。時間は午後2時から約1時間30分。どなたでもご参加できます。



展示替え等による休館日（4～7月）

4月19日（木）・20日（金）
5月 休館日なし
6月4日（月）・5日（火）
7月12日（木）・13日（金）

れきはく
トリウイア軍都金沢の面影
— 歴史博物館石引分室 —

旧陸軍の兵器庫であつた赤煉瓦棟の外観が特徴的な当館ですが、この本館以外にも、古い建物を利用した分室（別館）があることをご存じですか？博物館の近隣に県立能楽堂がありますが、その敷地内に立つ二棟の洋館が「歴史博物館石引分室」です。向かつて左側が第九師団司令部庁舎、右側が金沢偕行社で、両方とも明治時代に建てられた旧陸軍関係の施設です。戦後は石川県健民公社などに利用されていましたが、平成十九（二〇〇七）年に歴史博物館の分室となりました。

司令部庁舎は明治三十一（一八九八）年、第九師団設置とともに金沢城内二ノ丸跡に建てられました。昭和四十三（一九六八）年に現在地に移築される際、両翼が半分に切り縮められましたが、全体として原型をよく保っています。当初は一階中央に玄関ホール、二階のホール上部に師団長室があり、両翼には軍医室や参謀室などの個室が並んでいたと考えられています。



左：第九師団司令部庁舎 右：金沢偕行社

ルネサンス様式を基本とする外観は、同時期に建てられた第十一師団司令部庁舎（香川県善通寺市）などと同じであり、司令部庁舎としては典型的な形を示しています。昭和戦前期には、正面玄関の上にある三角形の破風（はふ）に「菊花御紋章」が付けられていました。

偕行社は陸軍高級将校の集会所、つまり将校サロンであり、明治三十一年に金沢市大手町に建てられました。現敷地内に移転したのは明治四十二（一九〇九）年で、移転後に増改築が施されたため、設立当初の内部がどのようなであつたか明確ではありません。しかし、一階に軍装品の販売所があり、遊戯室では将校たちがビリヤードや囲碁・将棋などの娯楽に興じていたと伝えられています。西洋の伝統的な建築様式を折衷して作られた外観は、デザイン性が強調された華やかなもので、他の師団と同一の様式で建てられた兵器庫や司令部庁舎とは異なる、偕行社の特色と言えるでしょう。よく見ると、床下換気口の枠に「陸軍星章」（星形）の意匠が施されるなど、細部も凝っています。

石引分室は収蔵庫などに利用しており、内部の見学はできませんが、外観はいつでもご覧いただけます。また「兼六園周辺文化ゾーン」には、他にも旧陸軍の貴重な遺構が現存しており、近世の城下町から近代的な軍都として整備されていった金沢の様子を今に伝えています。

※平成二十四年度春季特別展「れきはく特選資料展—収蔵庫からお宝登場—」の関連イベント「建物紹介ツアー」（全四回）でも、石引分室をご紹介します。



偕行社 陸軍星章



司令部庁舎 菊花御紋章の跡

※トリヴィアII 雑学的な事柄や知識、豆知識

平成二十四年度れきはくメイト

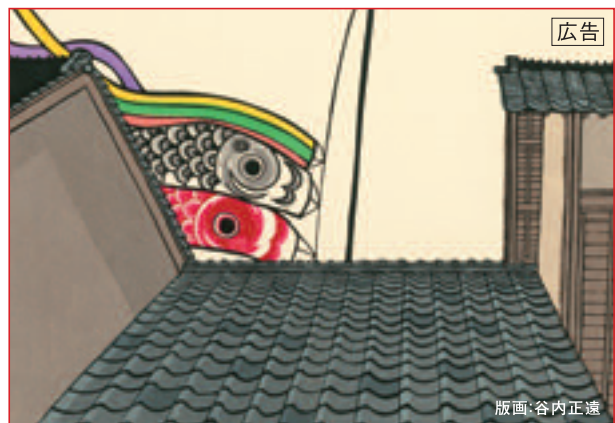
会員募集中!!

〈対象〉どなたでも入会できます。
〈会員の期間〉平成二十五年三月三十一日まで。
〈年会費〉年額一、〇〇〇円。
〈特典〉歴博の最新情報提供、常設展無料（会員証提示）ほか。
〈定員〉定員はありません。随時受け付けています。
〈入会申込・問い合わせ先〉普及課 TEL〇七六・二六二・三四一七
リニューアル準備のため、平成二十五年三月一日より全館休館が予定されています。ご迷惑をおかけしますが、ご了承下さいますようお願い申し上げます。

本多の森から

大雪に見舞われたこの冬、広い敷地を持つ博物館では職員が必死で雪かきをする日が続きました。出入り口を確保するため、敷地前の道に出て総動員で雪かきをする様子が写真に納まり、新聞に載ってしまうというハプニング（？）も。正面玄関前の融雪装置が止まり、開館時間までにお客様が通る道にどうにか確保した日もありました。
雪に覆われた長い冬が終わり、今年は春の訪れがよりいっそう嬉しく感じられます。博物館では赤煉瓦の建物を背景に桜が咲き誇り、冬の間噴水を止めていた中庭の石管モニメントも、眠りから覚めて流水音を響かせています。四月二十一日スタートの春季特別展は「れきはく特選資料展」。本多の森の爽やかな新緑と共に、貴重な文化財の数々が皆様をお迎えします。

広告



版画・谷内正遠



明治10年8月

加賀藩 前田家の出資により創業

金沢支店 / 〒920-8686 金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131

www.hokugin.co.jp

北陸銀行